

関東学院 学院史資料室 ニュース・レター

No.9

2006.11

目次

学院史資料室写真集 8	1
関東学院史料展 展示史料の紹介	2
学院史資料の紹介	13
資料・情報提供のお願い	14
編集後記	14



学院史資料室写真集 8 ・横浜外国人墓地にあるベンネットの墓碑銘

この墓碑銘の「He lived to serve」（彼は仕えるために生きた）という言葉はベンネットの奉仕の生涯そのものを表現したものである。
（参考資料：『A・A ベンネット研究』高野進、『私の歩いてきた道』高谷道男）

関東学院史料展

展示史料の紹介

「第1回 建学の精神を求めて—ベンネットと坂田祐一—」
2006年9月21日から10月12日まで開催
於：関東学院大学 Foresight21エントランスロビー



アルバート・アーノルド・ベンネット
Albert Arnold Bennett (1849~1909)

関東学院の源流の横浜バプテスト神学校の設立者・初代校長・教授。

ベンネットは1879（明治12）年宣教師として来日し、1884（明治17）年横浜バプテスト神学校を設立し、25年間学校の発展に貢献した。

ベンネットは教育・伝道・社会奉仕と多方面にわたり活動し、その奉仕の生涯は多くの人たちに深い宗教的影響を与え、その生き方は讃美歌213番に歌われている。（*8・9・11）

*12頁参考資料一覧の番号。以下同様。

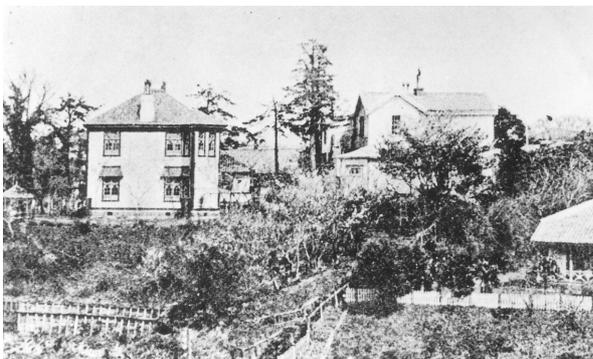
（横浜外国人墓地にあるベンネットの墓碑銘（表紙頁参照））



ベンネットと家族

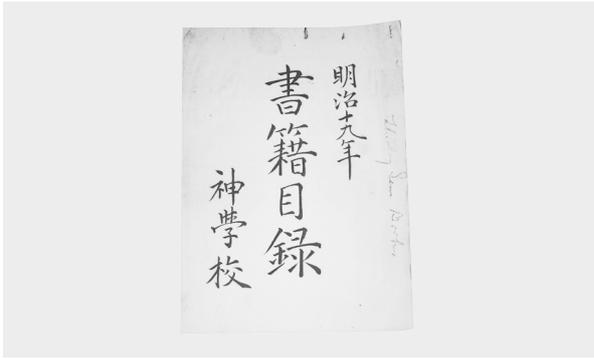
ベンネットには夫人のメラ・バローズ（Mela Barrows）との間に4男3女の子がいた。

夫人は音楽の素養があり、横浜バプテスト神学校の教師や、ベンネットが牧師をしていた横浜第一浸礼教会での讃美歌の指導、また、ベンネットの讃美歌集の編纂にも協力した。夫人はベンネットの召天後の1910（明治43）年に帰国し、1913（大正2）年にベンネットの伝記を出版し、1936（昭和11）年ニュージャージーの自宅で召天した。78歳だった。（8・9）



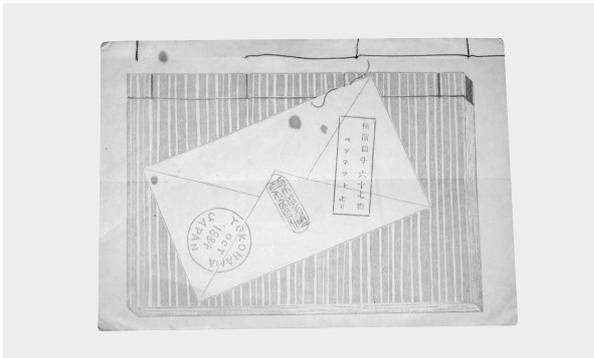
横浜バプテスト神学校校舎

山手64番地に設立された神学校は設立10年後の1894（明治27）年に施設を拡充し、市内と港を見渡せて、日本人街に接する75番地に移転した。丘の上右が校舎、左が学生寮、丘の下が横浜浸礼教会である。（1・10）



横浜バプテスト神学校蔵書目録・写
(1886 (明治19) 年の横浜バプテスト神学校の蔵書目録)

神学校開校2年後の蔵書目録で蔵書数は少ない。ベンネットは図書の実のためアメリカの支援者にも援助を依頼している。1890 (明治23) 年、インドの宣教師であり、図書に詳しい R. W. ファーガソン夫妻に図書の収集と整理を依頼し図書室の充実を図った。(1・9・15)



ベンネット夫妻が自身の支援者に送ったエッセイ
1884 (明治17) 年9月30日～1885 (明治18) 年5月21日

ベンネット夫妻の支援者に送った日本の紹介や活動近況についての報告。ベンネットは創立間もない神学校の充実のための資金援助をお願いし、土地建物の購入、図書の充実、学生への奨学金の必要を訴えている。(9)

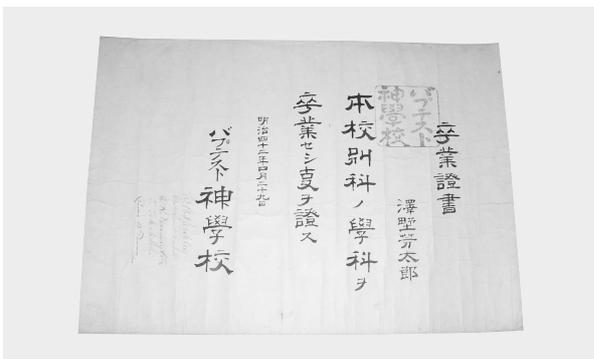
・137×192 (mm), 23頁



山手75番地関係書類 (3点)

横浜バプテスト神学校は山手64番地に土地と家屋を借りて発足したが、1894 (明治27) 年10月22日に山手75番地に移転した。敷地には宣教師館を改装した教室、講堂、寄宿舎、教会の施設があった。

この土地はアメリカバプテスト伝道協会が永代借地をしていた。(1・15)



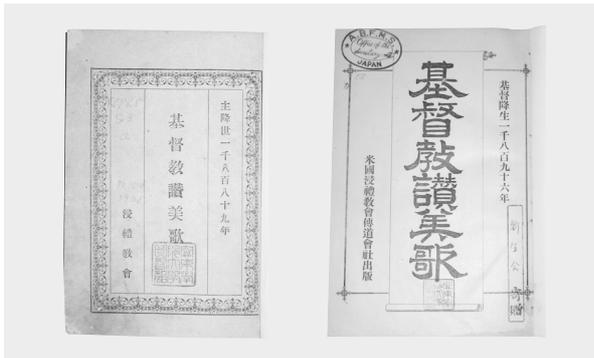
バプテスト神学校卒業証書

1909 (明治42) 年に卒業した澤野芳太郎の卒業証書。ベンネットの署名入り。

澤野芳太郎は卒業後、東北の農村地帯の伝道に使命感を感じ、宮城、岩手の地域に伝道した。澤野家は3代続きの牧師で、関東学院の卒業生である。(1)

大学図書館所蔵。

・348×480 (mm)



基督教讚美歌 ベンネット編集
1889 (明治22) 年版と1896 (明治29) 年版

先輩宣教師 N. ブラウンは1874 (明治7) 年に最初のバプテスト教会の讚美歌『聖書之抜書』を出版し、それ以後讚美歌の改訂作業を行っていたが、N. ブラウンの召天後、ベンネットが讚美歌集の編集を引き継ぎ1886 (明治19) 年に完成、出版した。1896 (明治29) 年版は増補版で、バプテスト教会として初めての楽譜付のものである。(9・14) 大学図書館所蔵。

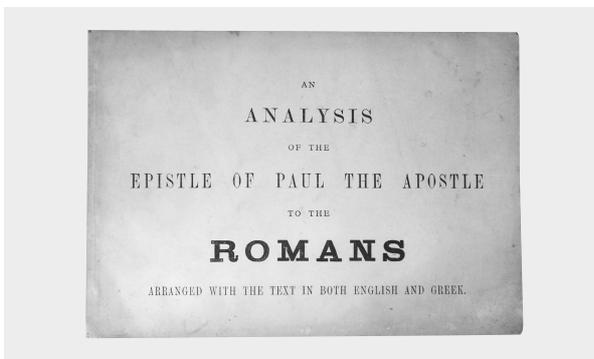
- ・ 1889年版…148×105 (mm), 347頁+11頁+ XIII 頁
- ・ 1896年版…226×154 (mm), 15頁+324頁+ XV 頁



人力車夫のためのパンフレット・写

ベンネットは人力車夫の生活の向上と伝道のため、1888 (明治21) 年から人力車夫のための小冊子を発行した。当時東京に5万人の人力車夫がいたといわれ、その多くは生活困窮者でベンネットは人力車夫の身近なことを例に福音を判り易く記しており、また、職業人として誇りを持ち、生きる喜びを得るよう励ました。(9)

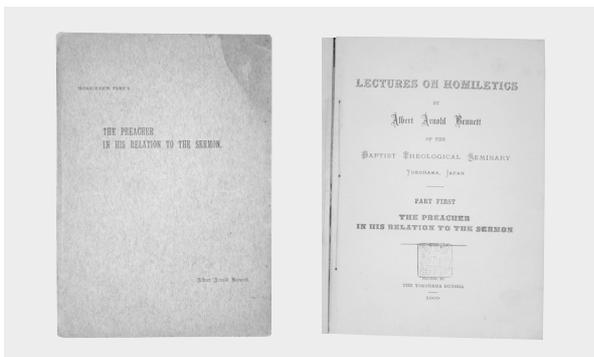
◆ベンネットの著作物 (以下2点)



『ローマ人への手紙分析』1902 (明治35) 年刊

新約聖書「ローマ人への手紙」のギリシャ語と英語による徹底した本文研究で、アメリカの聖書学者からも高く評価されている。大学図書館所蔵。

- ・ 190×267 (mm), 101頁



『説教との関連における説教者』
原著1909 (明治42) 年 翻訳1912 (大正元) 年

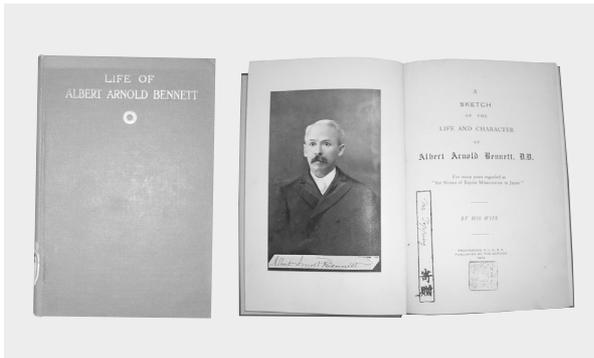
「説教者、また説教者たちの教師としての長い経験を持つ博士の文筆活動にふさわしい完結の書」といわれるほど評価されており、神学校で25年間説教の教師であったベンネットの「説教学」の集大成であり、最後の著作である。(9)

大学図書館所蔵。

(写真はいずれも原著。左は表紙、右は扉。)

- ・ 原著…182×128 (mm), 137頁
- ・ 翻訳…182×128 (mm), 300頁, 高橋楯雄訳

◆ベンネットの伝記と研究書（以下3点）



A SKETCH OF THE LIFE AND CHARACTER OF
Albert Arnold Bennett, D.D. / BY HIS WIFE 1913

ベンネット夫人によるベンネットの伝記と説教等。
1909（明治42）年の有馬の全国宣教師大会での大会説教も
収められている。
大学図書館所蔵。
（写真左は表紙、右は口絵と扉。）

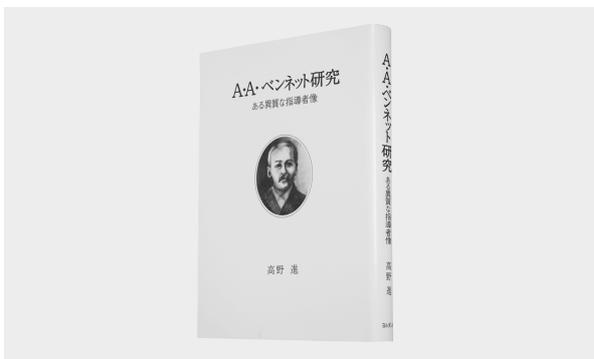
・ 197×133（mm），107頁



『アルバート・アーノルド・ベンネット その生涯と人物』
ベンネット夫人編著 多田貞三訳 1985（昭和60）年

上記の翻訳本。記者の多田貞三は元本学教授で、1909（明
治42）年10月11日の神学校創立25周年記念祝賀会でベン
ネットと握手し、その愛に満ちた対応に感激したという。

・ 188×135（mm），125頁



『A・A・ベンネット研究 ある異質な指導者像』
高野進著 1995（平成7）年

関東学院学院宗教主任で本学経済学部教授の著者によるベ
ンネット研究。

・ 195×138（mm），413頁

●ベンネット略年表

1849年 4月16日 アメリカ・フィラデルフィアに生まれる。
1868年 ブラウン大学に入学。
1872年 ブラウン大学卒業。
シカゴ・バプテスト・ユニオン神学校（後のシカゴ大学神学
部）に入学。
1875年 シカゴ・バプテスト・ユニオン神学校卒業。
マサチューセッツ州ホリスhtonのバプテスト教会牧師に就任。
1879年 日本宣教のためにバプテスト教会牧師を辞任。
12月6日横浜に到着。N.ブラウンが牧師をしていた横浜第
一浸礼教会の活動に加わる。
1880年 日本人伝道者養成の必要性を痛感し、日本人に説教指導を行
う。
1884年10月6日 N.ブラウン宅で行われた京浜地区の宣教師会で神
学校設立について提案し、承認され、山手64番地に横浜バプ
テスト神学校を開校し、初代校長になる。

1886年 N.ブラウンから横浜第一浸礼教会牧師の任務を引き継ぐ。
ブラウンの未完成の讃美歌編集と新約聖書の最終版の出版に
携わる。
1888年 人力車夫のための生活向上と伝道を目的に月刊誌「人力車」
を発行する。
1896年 三陸大津波の救援活動のため国内外の外国人によってささげ
られた見舞い品、見舞金をもって被災地に1ヶ月滞在し、不
眠不休の活動をする。この活動により日本政府より金杯を授
与される。この金杯は母校ブラウン大学に寄付した。編集し
ていた「基督教讃美歌」を発行する。
1900年 ブラウン大学より神学博士の学位を授与される。
1904年 セントルイスの万国博覧会で日本人のために奉仕活動をする。
1909年10月12日 召天 60歳 山手外国人墓地に埋葬される。



「人になれ 奉仕せよ」(色紙)

関東学院の建学の精神をあらわした校訓。
 中学関東学院の初代院長坂田祐が第1回入学式において力説し、関東学院教育の目的であり、理想である。(12)

・273×243 (mm)



中学関東学院創設時の坂田祐

坂田祐は東京帝国大学卒業後、1915(大正4)年、関東学院の前身である母校東京学院の教師となる。1919(大正8)年、横浜に創設した中学関東学院の初代院長となり、「人になれ 奉仕せよ」の校訓の掲げ、以来50年に亘り関東学院の教育・経営に携わってきた。(12)



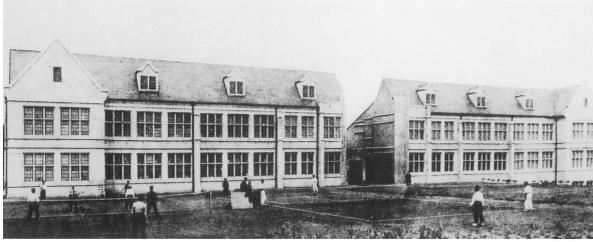
第一高等学校3年時の集合写真

坂田祐は苦学の人で、1909(明治42)年に東京学院中等科を卒業し、31歳で第一高等学校に入学した。
 同級生に、後の総理大臣近衛文麿や作家で文化勲章受賞者の山本有三がいる。(12)
 (前から2列、右から2人目が坂田。坂田の右隣が山本。同列の左から3人目が近衛。)



白雨会メンバーと共に

坂田祐は第一高等学校3年次の1911(明治44)年10月1日、内村鑑三の聖書研究会に入門を許可された。
 白雨会は内村鑑三の奨めにより、信仰の交わりを目的に12名の会員で1912年に発足し、終生変わることなく親密な交流が続いた。会員の中には後の東京大学総長南原繁や関東学院高等商業部教授でプロテスタント史研究の権威高谷道男がいる。
 坂田記念館に『白雨会会誌』があり、活動内容が記録されている。(12)
 (前列中央が内村、後列右から2人目が坂田、後列左端が高谷。)



関東大震災前の関東学院校舎

1921（大正10）年に建てられた鉄筋コンクリート2階建ての本校舎で、横浜市内から白亜の殿堂が見られ、その威容を誇っていた。

内村鑑三の1921（大正10）年3月11日の日記に関東学院を訪れた感想として「野毛山のつづきに新築されし関東学院の校舎を見た。米国バプテスト教会の経営になるもの、其規模大にしてその設備の完全なるに驚いた。其の校長は文学士坂田祐君、旧き柏木連の一人である」と記されている。（5・12）



関東大震災によって崩壊した本校舎

中学関東学院創立4年後の1923（大正12）年9月1日、関東大震災に遭った。

この震災によって建設されたばかりの校舎が一瞬にして崩壊し、職員3名が下敷きになって死亡した。このため、授業は捜真女学校を借りて授業を再開した。（3・12）



関東大震災の被害状況を調べる関東学院指導者

関東大震災により、校舎が崩壊し、横浜市内の火災延焼により寄宿舍及び校内諸設備、器具、機械、図書も多くを焼失し、復興のために11月の緊急理事会で仮校舎の建設と復興に必要な資金の調達が決定された。（12）



中学関東学院第1回卒業記念写真

関東大震災により、第1回卒業式は捜真女学校で行われ47名の卒業生を出した。

卒業記念写真は1924（大正13）年2月29日落成した関東学院の仮校舎の前で撮影した。（3・5）



1935（昭和10）年頃の関東学院（三春台）

左上の校地が高等学部で右が中学部。

震災後、施設も整備され、1929（昭和4）年の中学部創立10周年に現在横浜市の歴史的建造物に指定されている中学部本館の献堂式が行われた。

1927（昭和2）年に東京学院と合併し、高等学部、神学部が関東学院の組織に入り、施設も鉄筋建ての本校舎とその周辺に教室棟の木造校舎が幾棟も建設された。（1・5・12）



横浜大空襲

1945（昭和20）年5月29日、横浜はB29による大空襲を受け、関東学院も焼夷弾によってテンネー記念講堂をはじめ木造校舎のすべてと、高等商業部本館も屋上を貫いて落下した焼夷弾によって内部が焼かれ、貴重な蔵書5万冊も失った。中学部本館は残ったが、関東学院の建物設備の4分の3を失った。このため焼け残った中学部本館で、関東学院中学部・専門学校と、同じく空襲に遭った捜真女学校と3部授業を行った。（1・5・6・12）



初期の六浦校地

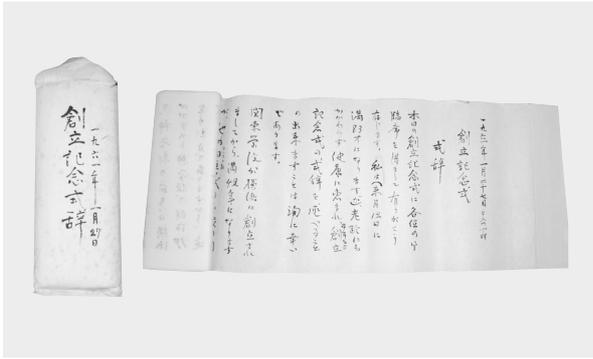
横浜大空襲により多くの建物を失った関東学院は終戦後、金沢八景にあった旧海軍の航空技術廠工員養成所の跡地を取得した。養成所の施設であった校舎、講堂、実習工場、製図教室、寄宿寮を使用して授業を行った。（1・12）



平潟湾埋め立て前の関東学院

金沢八景キャンパス前の湾の埋め立てが1964（昭和39）年頃から始まり、現在は住宅街になっている。

埋め立て前は静かな湾で大学のヨット部の練習の場でもあり、風光明媚なところであった。（1）



創立記念式辞 1961（昭和36）年1月27日

坂田祐院長の式辞。

関東学院が横浜に創立され42年になるが、バプテスト神学校から通算すると77年になると前置きし、学院の使命は「キリストの土台の上に人間像を形成することにあります」と、キリスト教主義の人間教育が学院の使命であることを強調している。そして「学術技能を行使して人のため社会のため奉仕する人物を多数輩出するにあります」と学院の目的を述べている。

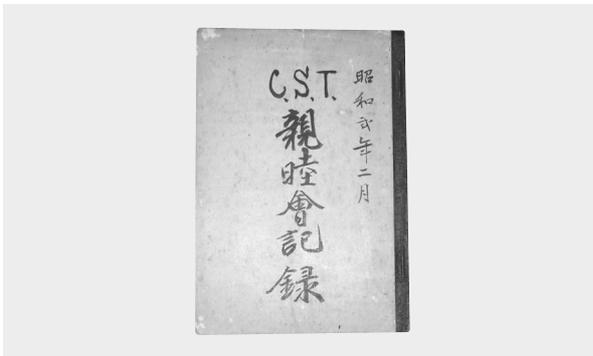
坂田記念館所蔵。



「東洋の門出を開く国際的協力」
関東学院の紹介と募金のためのパンフレット

アメリカのバプテスト・ミッションは横浜バプテスト神学校設立以来、多大の援助をしてきたが、中学関東学院の紹介と中学部から更に高等部設立のための援助を訴えている。(5)

・155×233 (mm), 16頁



基督教学校教師親睦会記録

横浜市内の5つのキリスト教主義学校（関東学院、英和女学院、共立女学校、フェリス女学校、捜真女学校）からなる親睦会の昭和初期の議事録。

戦時中、神奈川県当局から、各校の学則にある「本校はキリスト教の精神を以て教育する」の項を削除するよう要望があったが、この親睦会の5校の校長が団結して、神奈川県当局と会見し、建学の精神を守りぬいた。(12)

・233×160 (mm)

◆坂田祐の著作物及び伝記など（以下3点）



『新編 恩寵の生涯』坂田祐著 1976（昭和51）年

坂田祐が信仰誌『待晨』に「恩寵の生涯」と題して連載したものを酒枝義旗が年代別に編集し、解説を加え出版したもの。

・182×128 (mm), 586頁



『坂田祐と関東学院』
坂田祐先生記念事業委員会 1973（昭和48）年

坂田祐による関東学院の歴史の各時期における言葉を集めたもの。

・182×128（mm），273頁

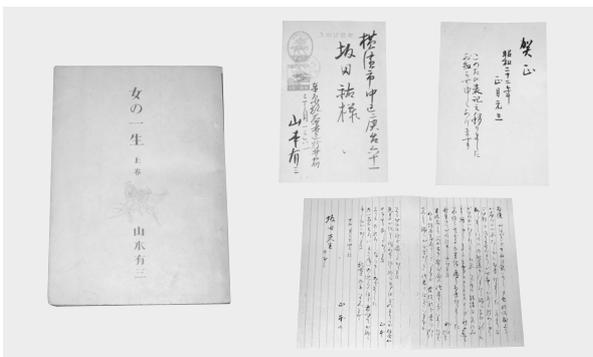


『坂田祐先生を語る』町田四郎著 1992（平成4）年

著者は中学関東学院1回生で坂田祐から学ぶ。
関東学院理事、同学院合同同窓会会長等をつとめた。

・182×128（mm），41頁

（大賀一郎葉書及びオープンチャペルの大賀ハス（裏表紙頁参照））



山本有三寄贈図書及び書簡

小説家・劇作家であった山本有三は、「女の一生」、「波」、「真実一路」、「路傍の石」などの作品があり、戦後、参議院議員として文化財保護法の制定など文化政策に大きな功績を残し、1965（昭和40）年に文化勲章を受章した。坂田と山本は第一高等学校の級友で、生涯を通じて交友があり、夫人が代筆した書簡が多くある。（12）本は大学図書館、書簡は坂田記念館所蔵。

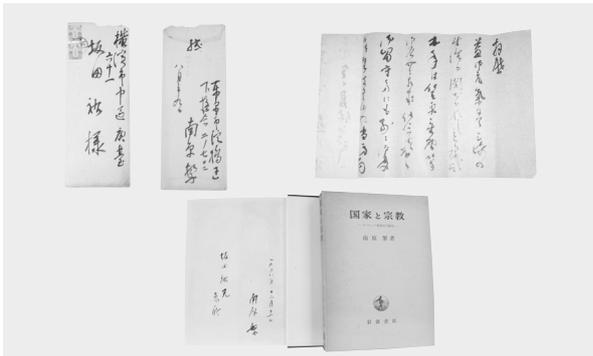
・『女の一生』…182×128（mm），302頁



坂田祐と南原繁

南原繁は1942（昭和17）年に『国家と宗教』を著しファシズムを批判し、戦後、東大総長として敗戦によって打ちひしがれた国民に平和国家建設を呼びかけ、新憲法や教育基本法の制定に関与した。

南原は『恩寵の生涯』の序文で坂田が戦時中「太平洋戦争中、著者が軍の圧迫に抗して、あらゆる干渉から、学院を守り抜いたことは、記憶されてもいい。」と評価している。戦後、南原は坂田の依頼により大学に講演に来ている。(12)



南原繁寄贈図書及び書簡

南原繁は戦後の東京大学の初代総長。坂田と南原は内村鑑三の聖書研究会門下生の集まりである白雨会の幹事であり、生涯信仰の交わりを続けた。坂田は南原より11歳半も年上で、白雨会の世話人的な立場にあり、南原の結婚に際しても媒酌人を務めた。(12)

本は大学図書館、書簡は坂田記念館所蔵。

・『国家と宗教』…210×148（mm）、264頁

●坂田祐略年表

- 1878年 2月12日 秋田県鹿角郡大湯村（現十和田町大湯）に父中村富造母ミエの次男として誕生。
- 1896年 この年の夏、勉学の希望を持って、家出、東京、横浜、横須賀や足尾銅山で働いた。
- 1898年 8月 陸軍教導団騎兵科に入学。
- 1902年 12月 陸軍士官学校馬術教官となる。
- 1903年 5月 四谷バプテスト教会でバプテスマを受ける。
- 1904年 4月 26歳で東京学院高等科に入学。
- 1904年 6月 日露戦争のため召集される。
- 1906年 3月 戦場満州より帰還。4月、この功により功七級金鶏勲章及勲七等青色桐葉章拝受。
- 1909年 3月 東京学院中学校卒業。9月、31歳で第一高等学校に入学。
- 1911年 10月 内村鑑三の門下に入る。南原繁等7名と白雨会を結成。
- 1912年 7月 第一高等学校卒業。東京帝国大学文科大学哲学科宗教学専攻に入学。

- 1915年 7月 東京帝国大学卒業、母校東京学院の教師となる。
- 1919年 1月27日 中学関東学院の設立に伴い学院長に就任。
- 1923年 9月 1日 関東大震災により、学院の全施設を失う。
- 1927年 4月 財団法人関東学院が組織され東京学院を合併、高等部長および中学部長になる。
- 1937年 4月 関東学院長に就任。
- 1945年 5月29日 横浜大空襲により学院建物、設備の4分の3を失う。
- 1949年 10月 関東学院大学長に就任。
- 1952年 11月 神奈川文化賞受賞。
- 1965年 3月 院長を退任。4月、勲三等旭日中綬章を拝受。
- 1966年 5月17日 横浜文化体育館で、開学80年記念式を挙行。
- 1968年 3月 関東学院理事長を退任。
- 1969年 12月16日 老衰により召天 91歳。

参考資料一覧

1. 『関東学院百年史』 関東学院（1984年10月6日）
2. 『関東学院100年 1884-1984』 関東学院（1984年10月6日）
3. 『関東学院五十年の歩み』 関東学院（1969年11月1日）
4. 『関東学院小史』 関東学院（1954年10月23日）
5. 『この丘に立って 一関東学院中学校高等学校80年史』 関東学院中学校高等学校（1999年11月6日）
6. 『関東学院と横浜大空襲』 関東学院中学校高等学校、関東学院橄欖会（2005年12月8日）
7. 『A SKETCH OF THE LIFE AND CHARACTER OF Albert Arnold Bennett, D. D.』 BY HIS WIFE 1913
8. 『アルバート・アーンロード・ベンネット その生涯と人物 一関東学院大学建学者の小伝一』 ベンネット夫人編著 多田貞三訳 関東学院大学（1985年10月6日）
9. 『A・A・ベンネット研究 ある異質な指導者像』 高野進著 ヨルダン社（1995年3月20日）
10. 『デーリング博士傳』 高橋楯雄著 渡部元発行（1917年12月23日）*大学図書館所蔵
11. 『私の歩いてきた道』 高谷道男（1988年1月27日）
12. 『新編 恩寵の生涯』 坂田祐著 待農堂（1976年8月10日）
13. 『坂田祐と関東学院』 関東学院（1973年12月16日）
14. 『日本バプテスト史略 上』 高橋楯雄 東京三崎会館（1923年5月24日）
15. 『日本バプテスト史略 下』 高橋楯雄 東部バプテスト組合（1928年12月20日）

『工学部教育の源流を求めて』

発行 関東学院大学工学部 1982(昭和57)年

序文によると、本書は「今回は学院及び本学部の原点をふり返ることを主眼として、山柁教授に『工学部の源流を求めて』と題する講演をお願いした。そして講演内容について、再度にわたる座談会を開催し、関東学院創設期とその後の変遷について、工学部教員一同知ることが出来たのは、既に30年を経た今日、まことに意義ある試みだったと思う。」とある。

第一部に、故山柁雅信教授による講演が掲載されている。演題は「大学の教育について内村鑑三に学ぶ」である。これは写真を含めて44頁からなる。

第二部は、〈座談会〉「工学部教育の源流を求めて」で、第一回と第二回に分けて行われた。第一回は47頁、第二回は30頁からなる。

第一部の講演を担当された故山柁雅信教授は、1916(大正5)年、東京に生れた。ご両親は内村鑑三の弟子であった。旧制の第一高等学校を経て、1942(昭和17)年に名古屋帝国大学理工学部航空学科を卒業した。1949(昭和24)年、関東学院大学助教授に就任、1957(昭和32)年、教授とられた。1961(昭和36)年には工学博士号を取得された。ご専門は流体力学及び水力学であった。

序文でも言及されているが、「関東学院の創始者、故坂田祐先生は1959年6月22日の大学礼拝において『私のキリスト教の信仰は内村鑑三先生の教えによって確立された』と語って居られるが、内村鑑三は札幌農学校 W・クラークの門弟であり、クラークから内村鑑三へ、そして坂田祐へうけつがれた本学の基本精神は、坂田祐先生を支えた人々の強い信仰と教育に対するひたむきな情熱によって本学創設の源流として脈動しているのを感じる。」という。

そして「クラーク博士が身を挺して行った実物に即した教育と研究方法は内村鑑三を畏敬する山柁教授の教育方針に引きつがれ、その情熱を教育と研究に向け実施されて、我々に多くの示唆を与えて来られた。」とも指摘されている。

山柁教授が「坂田祐先生を支えた人々」の一人であ

ることは当然である。講演の中では、日本における W・クラークの教育がまず論じられる。次に札幌農学校における内村鑑三、アムハースト大学におけるシーリー総長の教育、クラークの死と帰朝後の鑑三と続く。

講演内容は、楽しく読ませてくれる。

ここでは、最後の部分、「内村鑑三、関東学院を訪ねる」を紹介したい。

1921(大正10)年3月11日の内村鑑三の日記に、鑑三は、山柁教授のご尊父、山柁儀市氏が船長となった東洋汽船巴洋丸を訪ねた。鑑三は船長室において同行の兄弟4人と共に祈祷会を開き、「此船と其船長との上に神の祝福の裕に加はらん事を祈った。」

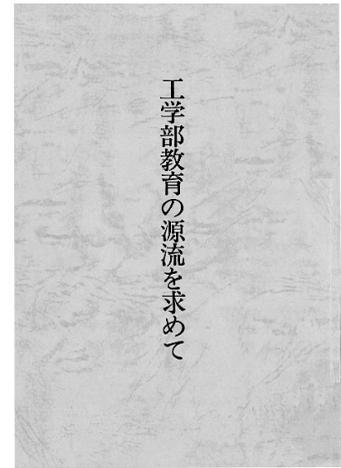
それから鑑三は、関東学院を訪ねている。そこには、「其校長は文学士坂田祐君、旧き柏木連の一人である。其教頭ならびに二三の教師もまた同信の友である」と記している。

山柁教授はこう結ぶ。「内村先生は……横浜に完成後間もない関東学院を訪れ、新造船の航海の安全を祈ったように、関東学院の尊い使命の達成を祈ってくれたのである。」

今回、私たちは「関東学院の尊い使命の達成」のために祈り、そのためにいかほどの努力をしているか、反省を迫られる。

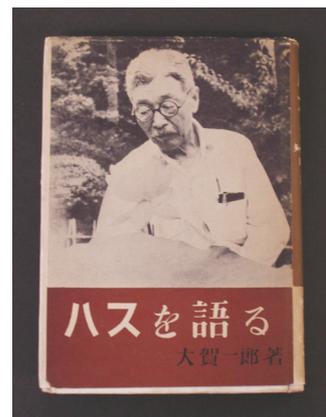
第二部の座談会では、単に回顧でなくて、関東学院の建学の精神に立って、いかに工学部の教育を推進するかについて、相当につっこんで、真剣に討議が行われている。ここから多くの知恵を汲みとることができる。

本学工学部は関東学院の伝統を大切に守ってきたと高く評価されてきたが、その証拠が本書に見られる。どの学部も学院各校もその設立の精神と存在理由を深く受けとめ直し、使命を果していきたいものである。



○引用文中、筆者による読点あり。

□ オープンチャペルの大賀ハスと大賀一郎寄贈図書・葉書



坂田と大賀一郎は内村鑑三の聖書研究会の同門で、1950（昭和25）年に関東学院大学教授となる。

大賀は千葉県検見川の泥炭層から発掘した2000年前の蓮の実を開花させた。このハスは大賀ハスといわれ、株分されたハスが関東学院大学（金沢八景キャンパス）のオープンチャペルにある。

多磨霊園の大賀一郎の墓碑銘は坂田祐の筆による。
（参考資料：『新編 恩寵の生涯』坂田祐）

本は大学図書館、書簡と写真は坂田記念館所蔵。
・『ハスを語る』…182×128（mm）、238頁

資料・情報提供のお願い

学院史資料室は学院に関する資料の収集をしています。

各学校、各部署等で発行されました刊行物は一部、学院史資料室にご寄贈くださいますようお願いいたします。また、各所で作成されたのち、既に保存期間を超えたか、不要になっている過去の書類、機器・備品、写真などにつきましても、情報を提供していただけますようご協力をお願いいたします。

人に
なれ
奉仕
せよ

関東学院 校訓

編集後記

本学院は2009年に創立125周年を迎えます。その記念事業の一環として学院史資料の展示会を定期的で開催します。第1回として関東学院の源流である横浜バプテスト神学校の創設者ベンネットと中学関東学院初代院長坂田祐を取り上げました。ベンネットは奉仕の生涯を送り人々に人格的感銘を与えました。坂田祐は校訓「人になれ奉仕せよ」を実践し、関東大震災、横浜大空襲と2度の壊滅的被害を克服し学院を復興、発展させました。（三浦）

今号は展示内容を記録することに重点を置きました。紙面の中では、詳細まで見ていただけない部分もありますので、興味をもたれた方は学院史資料室までお問い合わせください。（菊池）

KANTO GAKUIN Archives

関東学院学院史資料室 ニュース・レター 第9号

発行日 2006(平成18)年11月30日

発行人 関東学院 学院長 森島牧人

編集 関東学院 学院史資料室

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL. 045-786-7066 FAX. 045-786-2479

環境に配慮して

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています
2006.11.30.2000